天野 郁夫著

『教育と選抜』

『試験の社会史一近代日本の試験・教育・社会一』

佐々木 享(名古屋大学)

1

『試験の社会史』は、近代日本のさまざまな試験 —— 入学試験、進級試験、卒業試験、職業資格試験、官吏登 用試験、入社試験等 —— の発生と展開過程を、歴史的に 叙述したもので、それぞれのテーマにつき、19世紀ヨー ロッパの制度ないし慣行との対比も試みられている。章 別編成は次の如くである。

- 1. 近代化と試験の時代
- 2. 試験と選抜の伝統
- 3. 教育と試験の制度化
- 4. 小学校から中学校へ
- 5. 高等教育と試験制度
- 6. 資格試験制度の成立
- 7. 官吏任用試験と学歴主義
- 8. 帝国大学への道
- 9. 受験の世界 ---1900年前後
- 10. 試験と上昇移動の道

近代日本の教育史とりわけ学校教育史は、試験制度の歴史でもあるが、試験の発生と展開過程、およびその社会的意味を歴史的事実にそくしてたち入って分析した著作は知られていない。その意味でこの『試験の社会史』は、おそらくわが国はじめての試験制度あるいはそれにまつわる慣行からみた近代日本の教育史的な社会史の通史となっている。大学入試、高校入試が絶えず社会の問題化しているのに、試験制度それ自体についての研究がほとんど行なわれていないに等しい状況のなかで、それぞれの試験制度の概括的な特徴をつかむことと、試験制度がもつ社会的・歴史的役割の調査・分析という困難な作業をあわせすすめたこの著作の意義は大きく、末踏の分野を切り拓いたこの精力的な労作には敬意を表したい。

それだけに、20世紀初頭には戦前日本の学校体系が実質をともなって確立し、各種の試験制度もまた出揃ったといえるにしても、本書の記述が1900年代初頭までで打ち切られていることは惜しまれる。たとえば、われわれは本書によって、19世紀末まで続いた小学校における進級や卒業認定のための学力試験の実態と、その制度が1900年の小学校令施行規則で廃止されたことを知ることはできるが、廃止されて以後の小学校の進級や卒業判定の実

態とそれについての著者の評価を知ることができない. 読者は、この著書によって今日の大ていの試験制度の淵源を知ることはできるのに、現代のわが国の小・中学校では、テストあって教育なしと皮肉られる程に校内試験があり、また、「落ちこぼれ」などということばに象徴される現象があるにもかかわらず、落第あるいは原級留置がほとんど行なわれず、したがってそれに関する統計もないという、著者がしばしば言及するヨーロッパ諸国にはみられない奇異な現象に気づくことはできないし、この問題にふれたがらない教育行政当局の意向を知ることもできないのである.

2

『教育と選抜』は、『教育学大全集』の1冊として書き下されたもので、著者のことばによれば、「現代産業社会における教育と選抜の構造」を、ランドール・コリンズやフリッツ・リンガーにならって、「その成立の過程をあとづける」方法でとらえようとしたもので、とりわけ、「社会的な選抜と教育とのかかわりに焦点をあてて、学歴主義と学歴社会の成立と発展の基本的な構造を明らかにすること」を主要なねらいとしている。したがって、『試験の社会史』が試験制度に関する社会史的事実をより詳細に記述しているのにたいし、『教育と選抜』では、等しく試験を扱うにしても社会的選抜の機能という観点からとらえられており、全体として、教育と社会的選抜の形成・発展の歴史を理論的に整理・概説する努力がなされている。

この書物の紙幅の大部分があてられた戦前日本についての「教育と選抜の日本的構造」に対する著者の理解を 摘記すると次の如くである。

(1)近代日本の「学校教育制度は伝統的な階級構造を維持するよりも、新しいそれを創出する装置としての役学を果した」「2)階級構造の開放制に対応して、わが国の学校制度も著しく開放的であり、その開放制が人々の上昇移動への『野なりである。」をたえまなく『加力熱』する役割を果した。」(3)「学校制度は、制度の基本的な構造自体がの内部にもう一つの位階制的な構造をもっていた。」「社会的な上昇移動をめざす人々は、まず学校段階ごとに、教育費の負担能力によって選抜され、各階層段階を構成する学校間にはもっぱら知的能力のレベルに応じて配分されていった。」(4)「その学校への配分の手段として、もったも重要な役割を果したのは入学試験である。」」「いった人子したあと、学校間での転学の機会はほとんど開かれておらず、したがって入学時の選抜、ないしは(入学

者の側からすれば)選択が、どのような『学校歴』を獲 得しうるかを決定づけることになった.亅⑸∫わが国で は、教育資格の職業資格化が、ヨーロッパ諸国にくらべ て早くから、しかもはるかに広い範囲で進行し、学校は 教育資格だけでなく職業資格の認定=付与機関としての 役割を果たすことになった.」(6)「社会的規範についてい えば、わが国では、『業績』と『平等』という産業社会を 支える二つの価値が、ヨーロッパ諸国にくらべて早期に 確立され、政策面でも支持されてきた、とくに学校教育 の場合、その機会は知的能力に応じて開かれるべきだと する考え方が支配的だったとみてよい、 ただしこの原理 も財産の原理を超越するものではあり得なかった。(7) 「学校制度にもっとも中枢的な位置づけを与える、社会 的選抜機構の構造 |が、「わが国の学歴主義を、ヨーロッ パ諸国にくらべて早期に成立させ成熟させた.」「わが国 の学歴主義は産業化の進展とともに、 具体的にいえば企 業とそこで働く職員層の成長とともに発展することとな った.

以上が、戦前日本についてみた「教育と選抜の日本的 構造」の特徴であるとされるものであり、これらはいず れも、先学の研究、著者自身の研究によって裏づけられ ている。既往の研究水準をみごとに整理しているという 点で、当該の研究分野の「本格的な概説」を求めたこの 全集の編集企画にも応えているといえよう。

しかし、以上のようなまとめについては、評者には若 干の疑問もある。たとえば著者は、「財産原理」が第一に 機能していた点を除くと、戦前日本の選抜は「開放的」 であり、「業績」による選抜が支配的であったとしてい る。たしかに、下層階級の入学を拒むことに熱心だった 陸士・海兵などの軍隊の学校を除くと、選抜に際して階 級的な観点を重視した学校がほとんどなかったことに, 評者も同意する. しかし, 戦前日本の高等教育機関が性 による差別 (たとえば旧制高校は法令により、東京音楽 学校を除く官立専門学校は学則により女子の入学を拒ん でいた)を敗戦に至るまで貫徹していたことや教員養成 学校をふくむ官立高等教育機関が背丈の低い者をふくむ 身体障害者の入学を拒んできたことは、無視できない事 実だったのではないだろうか. さらに、1936年に医専・ 薬専の入試に関して「例へ学力試験ノ成績ニシテ優良ナ リトスルモ人格思想ニ欠陥ヲ有スルモノ……ハ之ヲ避ク ルコトーという通牒が出されていた事実に象徴されるよ うな思想差別があったことも無視できないのではないか. 著者が記述しなかったことをあげつらうことは評者とし ても必ずしも本意ではないが、これらの例は戦前日本の 「選抜」が差別としても機能していたことを示唆してお

り、したがって著者のいう「開放性」の理解の本質にかかわるようにもおもわれるので、指摘したものである。なお、この「開放性」に関連して、「平等」と「業績」の原理は「強固な文化的な障壁に行きあたらざるをえない」という指摘は、教育学の問題としても、あるいは社会学の観点からみても重要な意味をもつとおもわれるのだが、充分に展開されていないことは残念であった。

3

『試験の社会史』『教育と選抜』をともにすぐれた概説書と感ずるゆえんのひとつは、既往の研究にひろく目くばりされ注記されているので、試験あるいは選抜という現代日本の社会に普遍化しているテーマに関して、教育史的あるいは社会史的な研究の到達点のあらましを理解し得るからである。一般に、少なくとも評者が日頃感ずるところでは、わが国の教育学研究(の書物)には、当該分野の研究水準の到達点がわかりにくいという難点が絶えずつきまとっているから、これは重要な点である。これは教育社会学あるいは社会学の分野では当然のことだというのであれば、教育学がみならうべき点なのかも知れない。

なお、著者が方法的手がかりを得たとされるランドー ル・コリンズの『資格社会』が、全体としては概説書的 色彩をもつとはいえ、資格のインフレ状況という認識と 資格廃止論という明確で個性的な主張をふくんでいるこ とに対比してみると、『教育と選抜』では企業の採用方式 などよく知られた学歴社会の病理についての指摘はある ものの、著者の個性的主張がみえにくい、しかしよくみ ると、著者は、今日の高校入試に関していわれる「普商 工農」の序列や、いわゆる「輪切り選抜」、大学の入学試 験の難易度による序列づけは、「一元化された進学競争 の必然的な産物にほかならない」と書いている(203ペー ジ、傍点は引用者)、評者は、高校に国・公・私立の設置 主体の違いや、学科制度がある限りある程度の選抜は不 可避であるが、戦後初期の方針にたちかえって学区域を 小さくすれば、高校入試に関する限り、進学競争はかな りの程度に緩和できるはずだと考えている。換言すれば、 評者は高校入試をめぐる競争には作為的につくりだされ た面が強いと考えているのであるが、これを「必然的な 産物」とみなすところに著者の主張があるのかも知れな

(『教育と選抜』第一法規出版 1982年8月刊 A5判 222頁 定価1,800円,『試験の社会史』 東京大学出版会 1983年10月刊 B6判 326頁 定価2,000円)